

第8期 第4回 静岡市行財政改革推進審議会 会議録

1. 日 時 平成30年12月12日(水) 10:00~12:00

2. 場 所 静岡庁舎 新館9階 特別会議室

3. 出席者 【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田真委員、内山和俊委員、
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野真帆委員、杉山茂之委員、
鈴木貴子委員、西尾真治委員

【行政】

岡村文化財課長、矢澤参与兼文化振興課長、
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、永田芹沢銈介美術館長、
草分駿河区役所地域総務課長、
三宅総務局参与

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹、兵庫主査

4. 会議内容

(1) 開 会

(2) 議 事

登呂エリアの「目指す姿」の実現に向けて

(3) 今後のスケジュール

(4) 閉 会

審議会内容は以下の会議録のとおり

田形和幸会長：次第2の議事に入る。前回、登呂エリアが目指す姿の具体的なイメージについて、皆さまから様々なご意見をいただいた。今回は、前回の議論を振り返りつつ、まずは追加でご意見をいただきたい点について伺い、それも踏まえた上でさらに議論を深めていきたい。事務局の方で前回のご意見等を整理した資料があるので、まずは説明をお願いしたい。

《略：資料1により事務局説明》

田形和幸会長：ただいまの説明にあったように、芹沢美術館について「稼げる施設」「市民が誇りを持てる施設」を目指すという観点から、美術館がどのような施設になればよいか、もう少しご意見をいただきたいと思う。

小泉祐一郎委員：例えば、弥生時代の衣装や織物などをきっかけに誘導させる。芹沢銈介さんは日本のデザインの草分け的な方でいらっしゃるの、デザインという概念をもっと宣伝に使えないか。例えば、登呂遺跡の説明の中で弥生時代の衣装や織物について触れ、芹沢銈介さんについて紹介し、関心を持たせる。登呂遺跡とデザインの話に関連づけて、それならば美術館にも行ってみようと思わせるような工夫があればいいと思う。

内山和俊委員：芹沢美術館を調べれば調べるほどすごい美術館だということが分かった。国内に芹沢銈介さんの作品を展示しているところは3か所ある。一つは大原美術館の工芸館の中で、もう一つは東北福祉大学の中に芹沢銈介美術工芸館があり、銈介さんの長男である長介さんが初代館長を務めていた。銈介さんは、大原美術館、東北の仙台、そして静岡の3か所に自分の作品を展示したいという意向が強かったようだ。芹沢美術館の平成29年度のアンケートを見ると、初めて来た方の半数が芹沢銈介さんについて知らなかったということから、やはり情報発信の必要性を感じる。ブランドの高さをもう少しPRすべきだ。

植田眞委員：登呂博物館と芹沢美術館との繋がり方がなかなか難しい。芹沢美術館単体でもっとたくさんの人に来てもらうということも一つあり、いまの観覧料をもう少し高くして、先ほど言われた3か所と連携を取るとか。あるいは常設展だけでなく、料金を少し高くして企画展も設けたらどうか。いろいろな観光地に行くと、美術館でお茶やお菓子を出すようなところもある。芹沢美術館でゆっくりコーヒーでも飲めたらいいと思う。

西尾真治委員：一つに、美術館の建物自体に非常にユニークな価値があるのに、作品の保護という観点からいろいろなところを閉めたりしていてもったいない使い方をしていると思った。建物の価値を最大限に生かすような使い方を期間限定で検討してはどうか。常設展のようなものは作品の保護を優先しなければならないが、期間限定であれば建物のポテンシャルを最大限に生かす使い方ができると思う。そういうものを入れることで活性化を図るという観点はあるのではないか。もう一つは、芹沢先生のデザインは見ただけで心を掴む力がある。いままで知らなかった人も作品を観れば何かしら心に響くと思う。そこで、ミュージアムショップ間の連携ができないか。登呂博物館のミュージアムショップに芹沢銈介のグッズのコーナーがあり、そこには芹沢先生の作品や美術館のことが案内されている。関心を持った人が、実は近くに美術館があると知れば行ってくれるのではないか。ミュージアムショップから美術館に誘導する仕掛けを考えてもいいと思う。

鈴木貴子委員：芹沢先生のデザインはとても優れていて、国内外からも注目を浴びる作品だと思うが、残念ながらまだあまり海外の方には知られていない。最近の海外の方々を見ると、日本語や日本のものをモチーフにしたデザインに大変関心を持っている。情報発信することでもっと集客ができるのではないか。海外の人気の美術館のミュージアムショップではオンラインでもグッズが買える。そうするとWebでどんどん発信してもらえ

る。芹沢先生の作品もオンラインショップも含めて整備していくのがいいと思った。登呂と芹沢美術館との連携についてだが、教育的な面で言えば、中学生、高校生、あるいは社会人向けに織物体験をさせる。時間はかかってしまうが、小さなものを自分たちで織って、その後で染色体験をさせる。そういう形で美術館に誘導させる。現在も美術館で子ども向けのワークショップをやっているということなので、その場で単に何かを作ることだけではなく、場合によっては綿花から採取して糸を作るところから、織り、染めるというところまで、総合的にモノづくりの体験をさせる。あるいは、静岡にあるデザイン専門学校や大学とのコラボも考えられる。近年、海外で注目されているのがアートとイノベーションだ。イノベーションの世界でもアートが非常に重視されている。芹沢先生の作品には非常にポテンシャルがあると思うから、アートを生かしたイノベーションを作っていくというようなワークショップを、学生や社会人、デザイナー向けに実施していくのも考えられると思う。

坂野真帆委員：行革審の委員の皆さんからも知名度がないと言われてしまうことに驚いている。芹沢銈介さんについては、民芸運動の中での位置づけにおいては、海外に向けても知名度は抜群ではないかと思っている。しかし市民の中でも知られていないという現状を考えると、静岡市が芹沢銈介さんをどうしたいのかが曖昧なのではないか。美術館では過去の方という感じで、あるものを展示しているだけになっているが、民芸という中ではとても人気があるし、するがクリエイティブさんのような伝統工芸の若手集団にもスピリットとして受け継がれている部分はあると思う。昭和の時代に遡ればもっと知名度があったと思う。例えば市の何かの記念品に使われていたとか、家にのれんがあったとか、お菓子屋さんの掛け紙に使われていたというように、身近な生活の中の芸術美、それがまさに民芸ということだが、生活の中で目にすることがなくなってきたから芹沢銈介さんを知らない人が増えているのだと思う。作品の意匠、使用についてはいろいろとあると思うが、ライブ感を出すという意味では、これからもっと民間も含めて作品を利用していくということがあっていいと思う。または、いま魂を受け継いで芸術活動している人たちをもっとクローズアップしていくということがあっていい。美術館の中だけに留めていることに限界があるのではないか。例えば、芹沢銈介さんのお弟子さんの柚木沙弥郎の展覧会などには、若い方から年配の方までたくさんの方が来ているが、お弟子さんだということ知らないという状況がある。まずは静岡からクローズアップしていくべきだと思う。市として芹沢銈介さんをどうしていくかというスタンスをはっきりさせるのがいいと思う。

田形和幸会長：内山委員から大原美術館と東北福祉大学の話があったが、芹沢銈介さんの作品は国内で数か所に散らばっているということだ。芹沢美術館は常設の展示と、期間ごとに作品を入れ替えるスペースがあるのか。

芹沢美術館長：年三回、館内の全ての展示物を入れ替えている。常設でずっと展示しているものはない。

田形和幸会長：大原美術館などから作品をお借りするということはあるのか。

芹沢美術館長：特に東北福祉大の芹沢美術工芸館からはたくさんの作品をお借りしてこちらの美術館に展示している。大原美術館からもお借りするし、千葉県の柏市に個人でお持ちになっていた作品をたくさん寄贈されていることがあり、柏市からもたくさんの作品をお借りして展示している。

田形和幸会長：年三回入れ替えをされているということは、一年に三回は来ていただけるような、リピーターとして観に来ることができる施設ということか。

芹沢美術館長：それを目指して毎回違う企画で展示を行っている。

杉山茂之委員：議論に水を差すようだが、私は連携すべきではないと思っている。せっかくの強みが連携によって死んでしまうと思う。それぞれをどう立たせるかという議論の方が先決だ。経営者として私があそこを運営するのであれば、全く別のものを作って、別々のものを集客できる方がいいと考える。連携をあまり考えずに、それぞれの良さをどういう風に引き立たせるかを考えた方がいい。その視点で、ターゲットはもう少し絞った方がいいと思う。私はインバウンドに絞って選択と集中をすべきだと考えている。

田形和幸会長：そういうご意見ももちろんあると思う。

小泉祐一郎委員：連携するのであれば、客層と交通手段の共通性を考えて、静岡市内の観光スポットとどう連携するかが重要だ。車で移動する人に対して、例えば日本平の夢テラスや駿府匠宿からちょうど登呂遺跡が見える方向にパネルを作って登呂遺跡の解説を置くなど、次はそこに行ってみようと思わせるような連携の方が、全体の観光客を増やすという点でも有用だと思う。それから芹沢銈介さんをどう捉えるか。捉え方は、もう少し大きいスタンスで分かりやすく、シンプルにすべきだ。いろいろと詳しい説明をしなければならないことはなかなか一般の人には伝わらない。例えば、ちびまる子ちゃんやアニメ、プラモデル、家具のように、静岡市の特性と絡めてデザインの祖のような形で芹沢さんにスポットを当てる。この人はすごいのだといくら詳しく説明して、専門的なことをいろいろと言っても、入り口のところで捕まっていないと話が入らない。ちびまる子ちゃんとプラモデルと芹沢銈介というように、前段で大きく捉えた上でアピールをした方が一般の人に広く受け入れられると思う。

岩井泰次郎委員：杉山委員の独立性の話はもっとも基本的なことだと思っている。しかし、行きにくい立地や、インバウンドの旅行客はたびたび来てくれるわけではないことを考えると、やはり、ついで買いと言ったら怒られるが、知らなかったけれどあるのだったら行ってみよう誘導させることも重要だと思う。駿府城公園の巽櫓と坤櫓、日本庭園がセットになって、どうせなら一つだけではなく三つ見て行こうというように、ここに美術館があるのだったら行ってみよう誘導させる。わざわざそこにバスに乗って行くわけだ。どちらのターゲットもそこまで熱烈なリピーターではないと思うから、裾野を広げていくという仕掛けからすると、ショップや入場券の共有化などが有効ではないか。

田形和幸会長：大原美術館に行ったら、静岡には芹沢美術館があるということが案内されているのか。せっかく3か所あるのであれば、そこでのアピールも必要ではないか。それから、どういうお客さんに来てもらうのかも重要だ。そして、やはり登呂遺跡との連携は必

要だと思う。美術館だけに向かって来てもらうには少しインパクトが足りないかもしれない。

小島孝仁委員：皆さんのご意見はすべて正しいと思う。正解はいくつもあるので、どこを目指すかだ。同じエリアですぐ歩いて行けるような隣の場所に、全く違う集客機能を持った施設があるのはすごくいい。登呂遺跡だけで集客するのではなく、全然違うターゲットを呼び込める芹沢美術館が横にあるのは大変いいことだと思う。ただ、芹沢美術館に来た方の中には、登呂遺跡に行くのが目的で横にあるから来てみたという割合もかなり多いと思う。一般的な知名度は登呂遺跡の方が高く、登呂遺跡を目指して来たが、横にあるからついで行ってみる。一般的には芹沢銈介さんがどんな人なのか知らない人が多いと思う。芹沢銈介さんのことを知ってもらうために、小泉委員がおっしゃったように、芹沢美術館＝デザインという伝統のようなものを作り上げていくことも非常に大切だ。バス停にしても「登呂遺跡前」だけで、芹沢美術館という名前は出てこない。例えば専門学校や大学と連携して、何かの表彰式を毎年芹沢美術館で開催するとか、そういう芹沢美術館＝デザインというイメージを作っていく。イメージができあがったら、そこがデザインした登呂遺跡グッズを作って登呂博物館のミュージアムショップで発売するとか、芹沢美術館の知名度を上げるためのブランディングを単体でやるのがすごく大事だ。

田形和幸会長：しずおか信用金庫で取り組んでいる事業にも一つ足したらいいなと思っ
ている。いま子ども達が地場産業について知らないという現状があり、しずおか信用金庫では地場産業に関する冊子を作って静岡市の教育委員会に毎年寄付している。一年間に7千～8千冊を寄付し、授業の一環として使っていただいている。その中に染め物の内容もあるから、例えばその冊子に芹沢銈介さんのことを掲載し、学校でも紹介してもらって興味をもっていただく。登呂遺跡には市内の8割程度の小学校が見学に来るということだ。やはり子どものうちから興味をもってもらうことが大切だ。それから、デザインという話があったが、しずおか信用金庫では一年に一回、しずおか夢デザインコンテストというものを実施している。小学生に地場産品をテーマにデザイン画を描いてもらい、5千～6千点の作品の中から60人程度の小学生を表彰している。私たち民間の方でも少し手助けできることがあるかもしれない。芹沢銈介さんの作品が所蔵されているところが国内に3か所あるということだから、民間がやっていることとのコラボも一つ考えてもいいかもしれない。どんなところでどんなことを民間がしているのか、事務局の方でも情報を収集して皆さんに伝えていただきたい。

事務局：前回の宿題として、なぜあそこに芹沢美術館が建ったのかということ所管課が調べているのでご案内させていただきたい。芹沢銈介に関連する他の美術館との連携という話があったが、ネットワークをすでに持っており、その辺りについても補足として所管課から簡単に説明させていただく。

文化振興課長：美術館が建設された経緯については文書としては確認が取れなかったため、当時の職員やOBに聞き取りをした結果としてお話ししたい。美術館の整備、設置については、市民の皆様から芹沢銈介さんを伝承するための施設がほしいという要望が多く寄

せられたということ、それからご本人からも寄贈のご意向の中で、寄贈にあたる前提として美術館の建設の意向を示されたということで、当時の教育委員会の方で整備を目指した。現在地に整備を決定したことについては、やはり財政的に新たな土地を購入することが難しかったためだ。それと、教育委員会の社会教育課が文化振興の行政と合わせて文化財行政を所管していたということがあり、他部署の市有地を利用することなく建設を進めることができたということ、それから、登呂遺跡、登呂博物館への来場者が多く、芹沢美術館への誘客が期待できる、この大きな3点が理由で現在地に整備されたということだ。

芹沢美術館長：ネットワークの話だが、東北福祉大の芹沢銈介美術工芸館、柏市、当館、この3つは特に頻繁に作品のやり取りをしていて、気軽に貸し借りができる関係ができています。大原美術館や日本民芸館でも作品を持っているが、そこでも貸し借りが容易にできるような関係は築けている。

田形和幸会長：それでは次に、地域との連携について伺いたい。これは特に「市民が誇りを持てる施設」に繋がると思うが、登呂エリア周辺の地域の方々、あるいは静岡市民全体を登呂エリアでの活動に巻き込んでいくにはどうすればいいかなど、ご意見をいただきたい。

内山和俊委員：周辺の住民を巻き込んで登呂会という組織があると伺っているが、その活動状況について教えてほしい。

文化財課長：登呂会というのは、駿河区の登呂1丁目から6丁目、敷地、富士見の3つの学区を中心に、もともとは登呂遺跡公園の継承を地域でもやっていこうということで発足した会である。地域で登呂を継承していくためのイベントとして登呂祭りがスタートした。実際には10月6日を中心とした第一土曜、日曜に開催している。もともとは北側のバスの停留所あたりに出店がたくさん出て、博物館の前の広場では火おこし競争など登呂遺跡の体験イベントや、地域の皆さんの芸能発表会などのいろいろなステージを行っていた。今年で50回以上の開催になると思うが、静岡市でも補助金を出して応援している。登呂会は、いまは登呂祭りが主体的なものになっているが、愛護会のようなものもあり、公園の一部清掃などの活動をやっていただいている。現在の活動がどうなっているのか詳細は分かりかねるが、平成20年前後まではそうした清掃活動などもやられていた。

小泉祐一郎委員：南部小学校の頃の話になるが、市議会議長だった織田清さんという方が中心となって、登呂遺跡の保護、活用という形で活動していた。弥生時代の衣装を着て、今の水田を整備する前のもっと南側のあたりで実際に農作業をしていたと記憶している。確かに登呂祭りもあった。そうやってスタートした登呂会の活動は、だんだんと水田の管理も市が関与してきちんと整備されてきたこともあり、最終的に登呂祭りに集約していったのではないか。

田形和幸会長：しずおか信用金庫には登呂支店があり、登呂祭りには職員が参加させてもらっている。地元の企業やお店なども参加してくれているのではないか。

事務局：情報提供となるが、地域の方の活動に関して、登呂会議という団体で、アートロと

いう活動をされている方々がいる。静岡新聞社から「登呂で、わたしは考えた」という書籍が最近出版された。代表は本原令子さんという静岡市出身の陶芸家の方だ。登呂の土から土器を作ったりお米を育てたり、一年を通して土から作って食べて生きるという循環を体験する活動をされている。人数自体は20人程度の団体だが、年に何回か集まって、2010年から活動されている。

小泉祐一郎委員：登呂会議は地域住民というよりもっと広域の方々だ。たまたま私が県の文化政策課長をやっているときに、そこに補助金を出したことがある。オリンピック文化プログラムということで、県の助成を一部受けて、登呂時代の土器を地元の土で実際に作ることを夏休みに子どもたちに体験させる活動をされていた。地域住民というと、どうしても地元の町内会とか地元の学区というイメージがあるが、連携ということであれば、むしろ多様な団体がもっと関わるようにして多様性を求めていった方がいい。既存の団体に頑張ってもらおうといっても、団体にもいろいろな限界がある。活かすのは結構だが、もっと駿河区全体、場合によっては市外の広域的な部分も含めて連携を図った方がいいのではないと思う。

小島孝仁委員：地域連携について、いま話題の用宗を参考にお話する。私が用宗を開発するにあたって、どう連携するかが課題であった。住民の皆さんとの連携はなかなか難しいので、まずは商店との連携から始めることにした。ホームページの中に、用宗の商店を紹介するページを作った。用宗は週末と平日とで人の出入りが全然違い、平日の売り上げをどう上げるかが課題だ。そこで、平日に用宗に来たらお得になる「平得」というものをロゴマークと一緒に作り、用宗平得マーケットという形でホームページで紹介いただきホームページで発信していただいている。このように、まずは商店との連携から始めた。登呂遺跡にどう集客していくか、ターゲットを絞って例えばインバウンドの外国人を呼び込むことを考える時に、まずは自分が外国人になりきって考えてみる。東京や名古屋、大阪に降り立って、新幹線で静岡に来た。外国人がよくおっしゃるのが、静岡駅にあるインフォメーションセンターがどこにあるのか分からないということだ。例えばその観光案内所を竪穴式住居風に作り、スタッフに衣装を着ていただく。そして石田街道沿いの商店のファサードのところに土器を飾っていく。飲食店などでは料理を提供する時に土器を使っただけ。要は登呂だけでなく、登呂に行く方は駅を降りてから登呂までの間をずっと見て行くので、高揚感を高めていくことが必要だ。現状は、静岡駅に降り立っても登呂の雰囲気は感じない。そこからバスに乗り、登呂遺跡前に着くまでも感じない。車で来る方についても、東名の静岡インターから降りても、日本全国どこにでもある幹線道路の雰囲気しか感じない。いまの静岡インターは難しいと思うが、今度できるスマートインターには降りたところに竪穴式住居を置いておき、そこから登呂遺跡までの間にも何か仕掛けを作っておく。駐車場に入って残念なのが、いきなり料金はいくらと言われてしまうことだ。仮に駐車場の料金を取るにしても、その建物はプレハブみたいなものではなく竪穴式住居風にするとか、スタッフも弥生時代の衣装を着るとか、そういう演出も大切

ではないか。地域に連携してもらうためには、まずは登呂遺跡自体が本気を出さないと絶対に連携などしてもらえない。ここまでやっているのだと思っていただいてこそその連携だと思う。

坂野真帆委員：そもそも地域となぜ連携したいのか。目指す姿が「稼げる施設」「市民が誇りを持てる施設」だ。「稼げる施設」でいうと、小島委員がおっしゃったように、私たちも一緒に稼ぎたいと考える方々は、稼ぎどころがあれば参画してもらえと思う。市民との連携の話もあったが、市民に対して何のメリットもなく連携しましょう、私たちとこういうことを担いましょうと言うのはなかなか難しい。地元の方たちが愛護会という活動をされていたということだが、そういうことを担っていただきたいのであれば、担った分だけ地元や、そこに参画した人たちにとってメリットや充実感が感じられないと思う。「これをしてください、こうなりますから」というものがないとお誘いしにくいのではないか。地元の方だけでなく市民側から、こういう風に使いたいという要望があれば、規制緩和をしながら使い方を増やして行って、どうぞ使ってくださいと巻き込んでいく。そうすることでお金が落ちていくことにつながるかもしれないし、その方々から派生してもっと多くの広報活動ができるようになるかもしれない。そこはやり方ひとつだと思う。この間、フェイスブックで市の発信を見たが、ミュージックビデオが登呂遺跡で撮影されていたようだ。それが公開されて登呂遺跡に来たいという問い合わせが爆発的に増えるとか、そのようなことは考えられないか。

登呂博物館長：キュウソネコカミのミュージックビデオのことだ。ミュージックビデオ自体が非常にリツイートされていると聞いている。ただ、聖地巡礼のようにそれが目的で若い人たちが来ているかというところ、今のところ目立った動きはない。館内に色紙が置いてあることをアピールに使おうとは思っている。

坂野真帆委員：ミュージシャンの知名度の問題もあるかと思う。弥生時代の恰好をして、卑弥呼を崇めるといような内容だったが、あれを見て思ったのが、コスプレをする方々は昔の校舎でいろいろな格好をして自分たちを撮影しているらしい。知り合いが廃校を運営しているが、コスプレイヤーから借りたいという依頼が割とコンスタントに年間結構な件数であるそうだ。清水区のコスプレイベントが定着してきているので、高床式住居を貸し出したりして、そういう使い方もできるのではないか。

田形和幸会長：地域というより、もともとは、地域に誇れる施設ということをテーマにお話していただいている。地域に誇れるという中で、地域を巻き込んだ方がいいのか、もっと広域に連携を図ったほうがいいのか。つい最近、静岡駅北口に切符を買いに行ったが、こんなところに観光案内所があったのだなと思った。駅を降りてどこに観光案内所があるかというところ、階段の上だった。そこに観光案内と書いてあるかというところ書いていない。市民は分かっても市外から来た方には分からないのではないか。私は旅行が好きでよくするのだが、金沢の駅を降りたらすごいなと感じる。やはり雰囲気は大事だ。金沢の人口は静岡よりも少ないのに、駅はとてもインパクトがある。もう一つは、東名高速で静岡市に入ると、昔は登呂遺跡のマークだったが、今もそうか。それを見て静岡市に来たのだと思

うのか。そういうことはやっているにもかかわらず、やはり何か仕掛けが足りないのではないかと感じる。

《休憩》

田形和幸会長：再開する。先ほどから地域の方との連携ということで委員の皆さんからいろいろなお意見があったが、事務局からも補足の説明をお願いしたい。

《略：事務局説明》

小泉祐一郎委員：連携は二つある。一つは、地域との連携で、住民を含めた団体ということであれば、もともと登呂会の活動があり、農家の方々がやっていたのだが、いまは減ってしまった。例の住居跡の前の水田のところは保育園などとの連携でうまくいっているが、玄関口の駐車場の前は、耕作放棄とは言わないまでも以前に比べるとみすぼらしい状態だ。行った時の最初のイメージ、景観的な要素をどうするか。従来の登呂会に頑張ってくれというのはなかなか難しい。そういう人たちを多少活用するにしても、南側に関しては農業体験なり自然体験なり、学習的な要素も含めて参画させる新たな仕組みを作ることが必要だ。もう一つは他施設との連携だ。近くに SBS の駿府博物館があり、客層的に登呂遺跡とかなり重複していると思う。子供連れの親子が来るという点でいうと、大谷にふじのくに地球環境史ミュージアムがある。バーターというか、連携というか、お互いの広報をうまく組み合わせ一緒に PR することも一つの手段だと思う。

田形和幸会長：いま出されたご意見については事務局の方でまとめていただきたい。資料1の「多くの人に訪れてもらう／何度も訪れてもらうためにはどうしたらよいか」という点についてご意見を伺いたい、まずは事務局より補足の説明をお願いしたい。

《略：事務局説明》

田形和幸会長：登呂博物館に視察に行った際に子どもたちが稲刈りをしてしたが、そこで採れたお米は売っているのか。

登呂博物館長：売ってはいない。ご自身で体験料を払って収穫された方には持ち帰っていたが、まだ商品化はしていない。

田形和幸会長：お米以外に何か栽培しているのか。

登呂博物館長：基本的には水田だ。

事務局：一部畑があったと思うが。芋なども栽培していると聞いている。

文化財課長：あれは作られてしまった。水田の南側の部分はあまり積極的に使っておらず、水も流していないから、それでは畑ができるのではないかとということで、一部畑として利用されてしまっている。それについては文化庁から正しい使い方ではないから注意してほしいと指摘を受けた。水田として採れる作物を作るのはいいが、そうではないジャガイ

モヤサツマイモを作ってしまったら誤解を招くということだった。小泉委員がおっしゃったように、あの辺りをもっときちんと生かせる仕組みは必要だ。

内山和俊委員：水を流していないということとの関連になるが、11月末に稲刈りが終わった後、水田と水路を見せてもらった。南側の方に東屋があり、そこから水がちょろちょろと南側の道路の方に流れていた。北側の方は水が張ってなくて、水路が干からびていた。自然環境を愛する者としては非常にもったいない使い方だと思った。いま河川や水路の整備はコンクリート三面張り、生物が生息できないような状況だ。そこで、国の方では生物多様性の取り組みの関係で河川法の見直しを図っている。登呂遺跡の水路はすべて土でできている。水を流せば生物が生息し、魚類が棲む。コウノトリが降り立ったという話があるが、そういうことももっとPRできるのではないか。飛躍して、あそこに水を数年流して、ホテルを放流したらどうかと個人的には考えている。

文化財課長：登呂遺跡の再整備事業の中で、当初やっていたことが、いまはできていないということがある。整備が完了した時点ではできていたが、だんだん時が経つにつれてお粗末になってきた。内山委員からご指摘があったように、当初はずっと水が流れていた。それが、ずっと流すのはもったいないので、時間を制御しながら流すようになった。そして、いつの間にか、水田を使っている時だけ管理して、それ以外はやらないということになり、結果として水が干からびてしまった。そうした中で、カワニナだとかタニシだとか、そういう地元にいるものを放流しようという動きもあった。一時期、水をたくさん水田に入れることで水路が深くなり、落ちて危ないのではないかという意見が出て、いつの間にか、十分に管理ができないのであれば水を流すのをやめようということになったのかもしれない。内山委員が言われたことは、基本的にはできるように整備がされている。

内山和俊委員：地下水を汲み上げていると聞き、水田も無農薬でやられていると聞いたがこれは非常に素晴らしいことだ。いま農薬を撒くことによっていろいろな生物が死んでしまっている。自然のことを活かしてやれば、環境教育の場面でも使えるのではないかと思った。あれだけの水田があって、水路が張り巡らされているのにもったいない。農業の関係でいうと、冬期湛水という冬期も水田に水を張る農法があり、いろいろな地域がそういうことをやっている。生態系との関係でも、イトミミズから小さな魚、昆虫まで入れて、コウノトリが来るといって、食物連鎖を構築するような形もできると思う。干からびている状態を見て、非常にもったいない使い方をしていると思った。

小泉祐一郎委員：東名の静岡インターを降りると、登呂遺跡は右へということで、SBS通りへ誘導している。以前は西側から登呂遺跡の駐車場に来る車が圧倒的に多くて、東側から来る車はなかったのだが、最近はずいぶん東側から来て駐車場へ右折して入ってくる。スマートインターができるわけだが、どのようなナビゲーションをするか、道路の案内ルートについては既存の東名側からも含めて検証すべきだ。その際は、登呂遺跡だけではなく、他の観光施設との連携も含めた中でどう誘導するか、大きな視点でやるべきだ。一つは登呂遺跡への車での移動について、現状は自家用車や観光バスを利用していることを考えると、日本平や久能山、三保の松原を含めた車の移動が一つのポイントとなり、その案

内をどうするかを検討する必要がある。もう一つは、外国人の方が移動する場合で、静岡市の他の観光施設も含めた課題でもあるが、その二次交通の部分はどうするか。ここは私もなかなかいい知恵が浮かばないが、この二つを分けて検討する必要があると思う。

田形和幸会長：外国人の方は、日本を訪れて静岡へ行こうというときに、どこに行くかを決めて来ると思う。登呂遺跡に行こうと思って来てくれれば一番いいのだが、そうでなかった場合はどういう形で案内すればいいか。観光案内所に行ってもらえばいいのか。静岡市とすると、外国人を誘致する際の考え方を何か持っているのか。

事務局：観光交流文化局では、インバウンドは静岡市にとっても非常に重要だと考えている。ただ、具体的に引き込むためにどんな事業を打っているかという点、情報発信については近年頑張っているが、それが功を奏しているかという点、まだまだ実績にはつながっていない。静岡市内の外国人旅行客の宿泊者数はなかなか伸びていないと聞いている。静岡空港があるので、中国や東アジアからの利用が多い。毎年海外で旅行博というのをやっていて、そこでブースを出して情報発信もしているが、まだまだ発展途上である。

鈴木貴子委員：2、3日前に、東京在住の外国人の友人から連絡があった。現在東京でメディア関係の仕事をしていて、ある在日某国商工会議所のプロモーションの編集もしている方だ。静岡県がラグビーワールドカップの開催地ということで、大使と知事が対談をし、その記事を英語で載せることになった。その際に、静岡県の観光に関する記事を載せたいからどんなところがお勧めか、また、観光施設の広告を載せてくれるところがないかと相談があったので、いくつか宿泊施設、レストラン、鉄道会社などをリストアップして伝えた。各ホテルやレストランに電話して、経営者に英語でつないでほしいと頼んだが、英語が分からないと途中で電話を切られたと言う。渡したリストはほとんど話を通じなくて残念だったと言っていた。リストはほとんどが中部圏で、エコパのある西側だからというものもあると思うが、後で出来上がった記事を見せてもらったら、広告を掲載しているのは伊豆の方の観光施設だった。今年の5月頃に商工会議所の清水のインバウンドの担当の方と話す機会があったが、はっきり言われたのは、静岡は基本的には台湾や中国や東南アジアがメインなので、中国語には少し力を入れているが英語についてはまだまだということだ。実際にクルーズ船に乗って来ているお客さんの多くが、プリンセスのようなゴージャスな客船を利用し、だんだん欧米人の富裕層も来るようになってきている。そういう方々は英語を話すし、中国の富裕層も基本的にビジネスでは英語を話す。だから英語でのインバウンド対応を検討してはどうかという話をしたが、いまは英語による接客のニーズは感じないことごとく断られたというのが現状だ。静岡が考えているターゲットが静岡に近い東アジアの方々というのも正しいと思うが、クルーズ船に乗って来る欧米人とジャパン・レール・パスを使っている方にもポテンシャルはあるのではないかと。ジャパン・レール・パスは英語を使って旅をしている方の利用が多く、この方々にいかに静岡で降りてもらえるか。彼らは新幹線でのぞみが使えず、ひかりとこだまにしか乗れないから、静岡で降りる可能性が非常に高い。だから英語での情報発信をもっと増やしてもいいのではないかと。ある地方都市は、敢えて多言語化をやめて日本語と英語だけにしたら、結果

として外国人の数が増えたそうだ。

小泉祐一郎委員：静岡県観光のどこがまずいか。いくつかある。一つに、ここから撮ったこの写真が静岡だという風景が見当たらない。例えば金沢の兼六園の場合は、かならず灯笼が写る決まった位置から撮る。静岡のチラシやパンフレットを見ると、作っている側が飽きてしまっていて、新しいものを求めている。むしろ、この方向から撮った風景がここなのだということを一つ決めてイメージを定着させないとだめだ。静岡のイメージ、例えば登呂遺跡で言えば、ここで撮った写真ということを一つ決めて、外国人の方にも SNS 等でアップしてもらおう。イメージを定着させるための工夫が必要だと思う。

杉山茂之委員：少し話は変わるが、何で稼ぐか。全体の売り上げをどう構成するかということだが、キャパシティがそんなに多くないので、限られた中で一人当たりの単価をどう上げていくか。カフェや宿泊料、グッズや入場料などの話があったが、どこをどう上げていくか。売り上げが上がらないと利益が出ないので、どういう風に構成し、コンテンツを作っていくかを考えることがとても重要だ。その中で、飲食は非常に収益性が高い。それをどういう風にコンテンツを作っていくかという議論をもう少し深めた方がいいのではないか。

植田眞委員：東京や関西の友達に聞いてみたところ、登呂遺跡はもちろん知っていて、1回は行ったことがあるが、2回目は行かない。そういう感じだ。いつも同じような木片があり土器があるということだと、いつも同じような印象になってしまう。もっとリピーターとして行けるような工夫が必要ではないか。もう一つ、4時半に終わってしまうことも検討が必要だ。夜もライティングをしてカフェを利用できるようにし、少なくとも夜8時からまでは営業しなければなかなか稼げないのではないか。一つのアイデアだが、登呂で結婚式を挙げることも考えられる。挙式をしなくても写真を撮るだけでもかなりの需要があると思うから、2000年前の遺跡をバックに結婚式の写真を撮るのはニーズがあるかもしれない。

小島孝仁委員：私も杉山委員と同じように、いかに登呂遺跡を使って稼ぐかというのを第一に考える。いろいろな手を打っても、今の博物館の建物ではリピーターは難しいと考える。リピートさせるとか、誰か人に紹介してもらうには、空間がとても大事だ。最近、丸子池田線沿いと草薙にスターバックスができて大変賑わっている。なぜスタバにあれだけ人が行くか。コーヒーを飲みに行くというよりも、あの空間でコーヒーを飲むということが重要だ。スタバのコーヒーは他のチェーン店に比べて料金が安い。いま情報発信は一般の方でも誰でも SNS を使ってできる時代だ。一番情報発信力があるのが若い女性だと思う。その人たちにいかに来てもらって発信してもらっても非常に大事だ。例えば近年、山ガールとか釣りガールがブームになった。あれもファッション性でおしゃれにしたから若い女性が入ってきて市場が拡大した。いまの博物館の外観、中の内装、床、壁、天井、什器も含めて考えると、誰かに行ってみてほしいと勧めることが難しい。もしそれが芹沢美術館だけであれば、勧めることができると思う。芹沢美術館の足を引っ張ってしまっていると思うくらい、登呂博物館は正直にひどい建物だと思う。これは機能ではなく五感の問題

だ。毎日来たいと思わせるような空間作りは、ああいう施設だけでなく、いまはオフィスや工場にも求められている。

田形和幸会長：駐車場を降りて、古代の弥生時代に来たという印象は私もない。そこで採れたもので何か食事ができるということもない、お米でおにぎりを作って食べられるということでもない。これではリピーターをなかなか呼べない。雰囲気味わうことはやはり大切だと思う。それから体験できるものも必要だ。火おこしは確かにあるが、せっかくだから水を流してホテルを放流するというアイデアもあった。何かイベントなどをやったときに来る、その時に行ってみようと思わせる。そう思わせる雰囲気、イメージが大切なのかなと思う。最終的にどういう形がいいのかということで、やはり稼げなければならぬ、来ていただかなければならぬ。リピーター、口コミのような発信力、静岡に来たら行ってみようかと思わせる施設にしなければならないということだと思うが。

西尾真治委員：まとめ方に関してのアイデアになるが、資料1の中で期待する変化から目指す姿までのつながりを図で示している。こういうものはすごく大事でロジックツリーとかロジックモデルなどと言ったりする。ただ、この出発点のところがすごく大雑把になってしまっている。今日の話の中でも観光客の中身がインバウンド、芹沢美術館に来ている人、登呂に来ている人、小中学生とさまざま、ターゲットが全然違う中でいろいろな意見がたくさん出てきている。ターゲットをまずは明確に分けて、それぞれのターゲットがどういう変化をして目指す姿に繋がっていくのか、そのロジックの流れをもう少しターゲット別に整理した方がいい。いままでの議論を全部まとめてしまうだけでは大雑把できちんと目指すべき姿に繋がっていかないと感じている。もう一点、地域との連携のところで、冒頭に事務局から紹介があった高校生の地域貢献部の活動にすごく可能性があると感じている。行政側からこういうことを地域に期待したいと作って持つていくのも一つのやり方だが、むしろ、地域の中で何がやりたいのかを掘り起こしていく方が発想の幅が広がると思う。こうした高校生の地域貢献部のような活動の中に例えば地域の企業人の方にも入っていただき、単なるアイデアにとどまらずに、それを地域の活動、企業の活動として実際にアクションまで繋げていって、それを行政がバックアップするという形で関わっていくと、新しい形が見えてくるかもしれない。

杉山茂之委員：ターゲットを絞るのも大事だが、ターゲットを取って絞らないのもいいと思っている。いまはコンテンツさえ良ければ結構集客できる。手っ取り早いのは集客できるコンテンツを作ることだ。それが今回の趣旨と合っているかについては検討の余地があるが、まずは来てもらわなければ見てもらうこともできないので、そういうことから入るというのも一つの方法だ。いま皆さんから出たご意見をそれぞれに作り込もうとすると相当コストもかかってくると思う。まずはできるところからという意味では、一つそういうコンテンツを持つことが一番手っ取り早く集客できる方法だと思う。

田形和幸会長：資料1の最後の「期待する変化」を「目指す姿」の実現にどのように繋げたらよいかについて議論していただこうと思っていたが、この議論については次回行いたい。皆さんの方ではぜひそのことを念頭に考えてきていただきたい。ご意見も尽きないと

思うが、一旦ここで区切らせていただく。それでは、本日の議論は以上とする。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸